北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業／北海道里づくりアドバイザー情報誌

第６号　２０１３年２月

編集・発行/北海道農政部農村振興局農村整備課
〒060-8588　札幌市中央区北３条西６丁目
TEL　011-231-4111　/　FAX　011-232-4128
E-mail:nosei.noson1@pref.hokkaido.lg.jp

里づくり

カーリングの授業風景（北見市　馬渕陽子氏提供）

CONTENTS

● **地域づくりリレーインタビュー**
熊本大学文学部総合人間学科地域社会学　教授　徳野　貞雄氏
三重県多気町まちの宝創造特命監　岸川　政之氏
「農村活性化の秘策を教えます」

● **北海道里づくりアドバイザーレポート**　北見市　馬渕　陽子氏
「知ることの楽しさを伝えたい～常呂よいところ、一度はおいで♪～」

● **BOOKS**　『農村（ムラ）の幸せ、都会（マチ）の幸せ　家族・食・暮らし』／『高校生レストランの奇跡』

● **トピックス**

―人に学び、地域に学び、いまできることから始める―

「農村活性化の秘策を教えます」

～家族をベースに考えるT型集落点検／地域にあるものが宝になる～

熊本大学文学部総合人間学科地域社会学　教授　徳野　貞雄氏
三重県多気町まちの宝創造特命監　岸川　政之氏

昨年九月に開催した『地域づくり研修会』の講師として招いた熊本大学の徳野氏と三重県多気町の岸川氏に、地域活性化をテーマにお話を伺いました。タイプや取組は違っても地域に対する想いは同じ、地域づくりに取り組む上で大切なポイントを教えて頂きました。

徳野　貞雄（とくの　さだお）氏

昭和 24 年大阪府貝塚市生まれ。

九州大学大学院文学研究科博士課程修了。山口大学人文学部助手、広島県立大学経営学部助教授、熊本大学文学部地域科学科社会学助教授、平成 11 年現職。

食と農の専門家として日本全国の農村に出かけ、フィールドワークをこなす活動派。全国合鴨水稲会世話人。『道の駅』命名者。「日本と農業とムラは危機的状況にもかかわらず、従来の農学・農政は農地や作物の側面からしか見ない『生産力農業論』が中心であり、“ヒト”が暮らしの大きな変化に対応しきれていない」と、独自の農業・農村社会論を展開している。

岸川　政之（きしかわ　まさゆき）氏

昭和 32 年生まれ。

京都産業大学経営学部卒業後、昭和 57 年多気町入庁。平成 23 年「まちの宝創造特命監」に就任。

高校生レストラン「まごの店」やその先輩が運営する惣菜とお弁当の店（株）相可フードネット「せんぱいの店」など、コミュニティビジネスの手法を取り入れた地域おこしに取り組んでいる。これらの取り組みは、総務大臣優秀賞など多くの賞を受賞し、平成 23 年５月からは「高校生レストラン」と題しテレビドラマ化もされ話題を呼んでいる。

―本日は、農村地域の活性化についてお話を伺いたい

徳野／僕はまず、「地域とはどこをさすの？活性化とはなに？」というところから入るんです。みんな自分がやろうとしている取り組みの対象がハッキリしてないんです。範域も対象も相手が誰かも分からない中で、努力しても答えは出ない。これが今の地域づくりです。自治体にしても、行政施策を執行する上で必要な行政区域はありますが、必ずしも地域住民の暮らしの枠組みである地域社会とは一致していません。地域社会とは自分たちが生活してきた地域範域の原点認識なんです。「竹馬の友」というように、おおよそ小学校区が人間関係の非常に密なところであり、『ふるさと』と呼ばれるところです。地域づくりはこのような範囲が中心になります。

岸川／地域資源の活用ということが日本中で言われていますが、現在、「まちの宝創造特命監」として、その地域資源を活かして一生懸命、まじめに地域活性化に取り組んでいます。地域にあるもの、人とか物、歴史や文化、何でもいいんですが、『これがいいなぁ』と思ったものを見つけると、それが一番輝くのはどのステージかを考え、実際にステージを提供することにずっと腐心してきました。いろいろなところで、そういう宝を見つけて輝かせることにすごく生き甲斐を感じています。

―地域の活性化を考える上で重要な視点は何か？

岸川／私たちの取組の軸は『人口問題』です。五十年経ったら日本の人口は統計的に三割減ってしまいます。注意しないといけないのは、平等に減らないということです。東京は減りません。私たちの町は頑張りますから二割程度で抑えます。でも、隣の町は五割減る、そういう状況なのです。だけど、人口が減っていくのは仕方がないんです。私たちの町の人口を二倍にしたら、他の町の人口がもっと減るわけですから、日本の中で取り合いをしているだけなのです。考えなければならないのは、五十年先、百年先の子どもたちが、町に残ること、町から出て行くこと、どちらも選択できる地域づくりをすることだと思います。そして、出て行った子どもたちが、『盆と正月には絶対ふるさとに帰るぞ、友達にも会うぞ』と思えるような、そんな『ふるさと』にしないといけない。それが私の究極の目標ですね。それを地道にやっているということです。

徳野／人口は増えない。そして、人々は経済だけでは生きていない。日本の社会は、明治以降の人口増加を背景に産業資本主義が発達した特殊な国で、高度経済成長期に貨幣経済が急速に浸透しました。人口増加＝経済発展という原理です。もっと経済発展しなければならないと云う論理しか未だに行政

手法はありません。しかし、人口の増加によって豊かになる高度経済成長期のパラダイムは、現在では通用しない時代です。本当はもう一度足下から地域を作り見直さなければいけないんです。物質的なレベルが一定程度になったら、人が求めるのは安全だとかいろいろあると思いますが、僕であれば家族や親族をベースにした安定化ですね。モノとカネからヒトの時代です。

―人口が減少するのであれば、交流人口を増やそうということになる

徳野／活性化の目標で、『人口を増やすこと』という考えは根強く、定住人口が増えないとなると今度は交流人口だといって、交流人口をもの凄く地域の活性化につながると評価しているわけです。でも違うんですよ。そういう人たちは雪おろしをしてくれますか？年寄りの介護をしてくれますか？理髪店にも、文具店、洋服屋さん、電気屋さんにも行きません。交流人口は経済効果の裾野は意外と狭し、社会的効果はもっと低いです。

岸川／私たちの町でも、人口を増やすにはどうしたらいいとか、たくさんの人が町に来てお金を落としてもらわなければならないと思っている人も多いですね。私たちはそういうことよりも地方の在り方を考えています。気持ちは『オープン型』でいろいろな人の話を聞きますが、でも見ているのは足下だけなんですよ。だから、他を全然うらやましがりません。例えば、『札幌はすごいなぁ～こんなところがあって』とか全然思いません。そんなことを言っても仕方がないですから。自分たちの足下を見て、自分たちの地域資源を一生懸命磨いて、それを輝かせていく。そして、宝にしていくということを非常に真面目に真剣にこつこつやっています。

―地域活性化のポイントは何なのでしょう

岸川／ポイントは三つあります。一つは『ないものは探さない』あるものばかりを見つけています。例えば「まごの店」が生まれたのも、地元に相可高校があるというのを見つけたのがきっかけです。知り合ったら、すごい生徒や先生がいたと。地域の『あるもの』だったんですね。

二つ目は『自分たちで考える』ということです。コンサルに頼んでアドバイスをもらうのはいいけれど、丸投げするんじゃなくて完成度が低くてもいいから自分たちで考えて欲しいです。

三つ目はとても大事なことで、『ビジネス』を意識するということです。「まごの店」は九千万円というお金をかけましたが、運営の費用は一円も出していません。ランニングの費用は掛からない仕組みを考える。これが継続だと思っています。人件費が掛からないので投資もできるわけですが、そういう仕組みも含めてビジネスという感覚を大事にしてやっています。

高校生レストラン「まごの店」
“地域の夢を乗せた、日本中どこにもないレストラン”

右：オープン当初（H14.10.26）は、約20㎡の屋台のようなお店でした。「うどん」が美味しいと評判になりました。
左：料理家を目指す高校生の夢を、建築家を目指す高校生が形にした現在の店です。（H17.2.19オープン）壁面の絵は、多気町立佐奈小学校５年生 23 名の力作です。

―地域の現状把握と活性化方策を考えるための具体的な方法を教えて下さい

徳野／私はどこに着目するかというと、自分が責任を持ち、関心がある家族や親族、自分の地域の人たちの範囲なんです。自分と自分の家族、それと地域の人達の暮らしに一番関心があるのです。行政は仕事として、人口であるとか、地域発展、地域活性化などと言っていますが、ここをベースに置いて考えないとダメなんです。そこで、僕は家族のあり方をもう一度見直して、それをつなげる方がいいだろうと考え、『T型集落点検※』を提唱しているんです。

※T型集落点検

〈概要〉

家族や集落の実態を把握して、これから集落はどんな状況を迎えるかを予測するために有効な手法。

ある集落を点検しようとする場合、なるべく夫婦同伴で集まってもらい、自分たちで模造紙に地図を書き、集落内に住んでいる家族を片っ端から書いてもらう。続柄や職業なども全て書き込む。次に、よそに出て行っている子どもや孫もどこに住んでいるかまで書き込み、Uターンしそうな子どもにはチェックを入れる。T型というのは、父親―母親を水平に書き、その下に子ども、その子どもが結婚していれば同じ方法で記入していくという、その形がアルファベットのTの形に似ていることからそう呼ぶようにしたもの。

〈効果〉

第一にその家が安定しているかどうかを見ることができる。例えば、一人暮らしのおばあさんがいる。彼女は行政の調査では独居扱いになるが、同じ集落内に次女が嫁いでいて、歩いても数分で行ける場所に住んでいて、孫もいると、このおばあさんは実質的に多世代同居となる。このように、具体的に家族の安定度を点検することによって、この集落の将来の姿を想定することができる。それをベースにして、十年、二十年先の集落の運営を考えることができる。

〈実例　熊本県山都町におけるT型集落点検〉

長男が今は宇土市に出て行っている農家があった。父親は、「長男だから将来帰ってきて、家を継いでくれる」と考えている。しかし、この長男の妻も宇土市出身で、当然、妻の実家も近くにある。となると、長男はなかなか帰ってこないだろう、向こうの家に実質的に婿入り状態にある、ということが分かる。それではどうしたらいいか。その家には独身の娘もいて、今は熊本市に住んでいる。いずれ結婚することになるが、その際、山都町の実家から車で十分で行ける距離のところに住んでもらえればいい。婿を取るのではなく、嫁に行くわけだから、特別無理難題というわけでもない。そのうち家の近くで農地を転用し、家を建てる。農家が持っている最大の武器、土地を使い、「近接別居」となる。娘も会社に通うと思って実家で百姓をすればよい。そして娘に言う、「子どもが生まれた時は、すごく助かるよ」と。実家の母親は、近くにいれば三百万円分の価値がある。ベビーシッターや保育園の送迎、ときにはご飯の買い物、掃除、洗濯。これを全部タダでしてくれる。これは、すごい「人間関係資源」なのである。

（『農村の幸せ、都会の幸せ』二〇〇七年　NHK出版」等より抜粋・加工）

―地域づくりリーダーに求められる条件とは？

徳野／農家の後継者とうちの学生とで話をさせると、圧倒的に生活への実態感の格差があります。学生は自分のことしか考えていないのよ。でも農家の後継者は、自分だけではなく親のこと、農地のこと、ムラのことなどをいつもではないけど意識を持っています。結婚に関しても、結婚がゴールではなくて出発点で、それからの生活のこと、周りの人たちとの関係、跡継ぎをつくって親の面倒を見て、隣近所の人の面倒を見て、ということを何となく考えているんです。このように、みんなのことを想っている人がリーダーだと思います。

岸川／今のリーダーは、自分以外の人にいかにチャンスを与えるかを考えていくべきだと思います。リーダーばかりが場数を踏んでスキルアップしていくのではなく、その周りの人たちを輝かせるように、最初は自分が前に出てもいいですが、いつの間にか他の人たちを舞台に上げていく。そういうやり方を出来る人がリーダーであるべきだと思います。

そして、ちっちゃいことでもいいので、一個一個に光りを当てていく。バットを思いっきり長く持ってホームランを打とうと思うのではなく、バントでコツコツやっていけば点を取れると思います。皆から認めてもらって点が取れる方が絶対いいじゃないですか。

―行政マンや北海道里づくりアドバイザーに対して一言

岸川／一生懸命『オープン型』の気持ちを持って、地元を愛して欲しいと思います。地元に無いものを探さないで、あるものを探す。本当に一生懸命探して、宝にして欲しいと思います。私が実際に現場に行って農家の人などから直接話を聴くのは、出会いに感動があるからです。その人たちがやっていることに対して、どうしたらいい環境を提供できるかを真剣に考え、やっていくだけなんですよ。難しいことではないんです。「凄いですね。こんなことやっているんですか？」と心底感動し、『この人はどうやったら一番輝けるだろう』、『この人の悩みはどうやったら解決できるだろう』と考えて、真面目にお付き合いするだけなんです。

徳野／是非、『T型集落点検』をやって欲しいのよ。名前と年齢ぐらい知っておいてよ。地域に居る人だけではなく、他所に住んでいてもよく来る人も。その方法を具体的に教えますので、みんなで会合をもって実践してください。

T型集落点検の様子

ひとつの事業を実現するためには、たくさんの人とかけあい、たくさんのハードルを超えなくてはいけません。すると、ややもすると目の前の試練にしか目がいかなくなり、そのハードルを超えること自体が目的化してしまいそうになるのです。

「あかん、あかん、ちょっと道にはぐれたぞ。最初の目的が変わってしまってるやん！」それに早い段階で気づく必要があります。もし間違ったとしても、それに気づいたら、誤った地点まで戻って、もう一度正しい道に行き直せばいいのです。

「何のためにこの事業をやるのか」

「誰のためにやるのか」

「何をもって幸せとするのか」

いつも目的を見失わないよう、自分に言い聞かせています。

覚悟を決めて、軸をぶらさない。

まちづくりの話だけでなく、自分の生き方、ポリシーとして、いつも心がけています。

料理は心だ！夢無限大

（『高校生レストラン』二〇一一年伊勢新聞社発行」より抜粋）

BOOKS

今回は、「地域づくりリレーインタビュー」に登場したお二人の著書をご紹介します。

■『農村（ムラ）の幸せ、都会（マチ）の幸せ　家族・食・暮らし』　著者：徳野貞雄

かつて百姓のせがれだった都会人は、ムラに残した老親を気遣いながらも帰れず、全国各地から「新鮮で安全な農産物」を求め、「グリーンツーリズム」で週末を過ごし、「定年帰農」に憧れる。果たして、それだけでいいのか？都会に頼る農村、農村に憧れる都会という歪んだ構造を農村社会学の視点で捉え直し、日本人の「家族」「食」「故郷」の幸せの行方を占う一冊です。

■発行：ＮＨＫ出版　本体 740 円＋税

■『高校生レストランの奇跡』　著者：岸川政之

先進的なまちおこしに取り組んでいる自治体のひとつとして注目されている三重県多気町。高校生レストラン「まごの店」の取組は、テレビドラマ化されて平成２３年５月から全国放送された。平成２４年度に道立から市立に転換した三笠高校は、多気町相可高校をモデルに食物調理科が開設され道内一の競争率を記録している。

多気町のまちおこしの立役者である多気町役場の職員、まちの宝創造特命監の岸川氏がこれまでに携わったまちおこしの取組を中心に、ご自身の生い立ちも含めて綴った一冊です。

■発行：伊勢新聞社　定価 1,470 円（税込み）

食用ほおずきの環

奈井江町『ほおずき畑』は、農家女性３名が食用ほおずきの栽培を通じて地域づくりに取り組んでいます。こんな取組が道内に広がりつつあります。

日高町（旧門別町）『沙流太ほおずき絆の会』という高齢者が中心となった協議会は、今年度食用ほおずきの栽培に挑戦しました。富川高校商業科と連携しながら、生徒と一緒に苗の移植から収穫、スイーツのレシピ開発にまで取組が広がっています。

今年も食用ほおずきの栽培を通じた地域づくりの環が広がる予感です。

★★★

北海道里づくりアドバイザーレポート

「知ることの楽しさを伝えたい」
～常呂よいところ、一度はおいで♪～

北見市　馬渕　陽子氏

馬渕　陽子（まぶち　ようこ）氏
昭和 30 年北見市常呂町（旧常呂町）生まれ。昭和 49 年常呂農協に就職。昭和 55 年寿退社し、小麦や玉ねぎ、甜菜を栽培する農家に嫁ぐ。ＪＡ北海道女性協議会副会長、オホーツクＪＡ女性協議会会長、ＪＡところ女性部部長、常呂厚生病院運営委員、ＪＡところ女性部直売所「あおぞら市」代表などを務める。

ＪＡ北海道女性協議会副会長、オホーツクＪＡ女性協議会会長、ＪＡところ女性部長といった重責を担うとともに、地元での地道な活動も続けている馬渕アドバイザー（ふる水指導員会幹事）から、ご自身の原点に触れる素敵な話を伺うことが出来た。

■農村女性グループの立ち上げ

馬渕さんが住む北見市常呂町（旧：常呂町）といえば、カーリングが有名である。馬渕さんご自身はカーリングをしないが、熱烈な応援団である。なぜなら、娘さんがカーリングチーム「ロコ・ソラーレ」で活躍する選手なのだ。ジュニア世界選手権に二年連続出場、帯広で就職するも常呂に職を見つけ、本橋真理さんとロコ・ソラーレでカーリングを続けている。カーリングに対する娘さんの情熱を見ていると『夢を持てば叶う』と本気で思うそうだ。そして、馬渕さんご自身も多くの夢を実現させてきた。

勤めていた常呂農協を退職し、馬渕さんが嫁いだ先は、偶然にも友人二人の嫁ぎ先と同じ豊川地区の農家だった。その頃、農協女性部は部員が少ないため休部する地区も多く、豊川地区もその中の一つで若い農家のお嫁さんたちが集まる場がなかった。

農家のお嫁さんは慣れない生活で苦労も多く、仲間で励まし合いストレスを解消できる場が必要だと考えた馬渕さんは、昭和六一年に女性グループ「手作りの会」を仲間とともに立ち上げ、農家の女性が繋がる場をつくった。これは、農協とは全く関係のない組織で、例えばパンを焼く、グミを作るなどといった生活に潤いと楽しさを見いだす自由な活動を行い、三十年以上経った現在も続いているというから驚きである。

また、こうした基盤があることで、他の地域と比べて農協女性部の加入率が高い、女性部の仲間意識が強いなどの良い面が見られるそうだ。このグループの代表は現在も馬渕さんが務めているが、これが様々な活動に関わっていくきっかけとなっていった。

■直売所「あおぞら市」の開設

現在、ＪＡところ女性部長である馬渕さんが意識して活動していることは、『仲間と一緒に楽しい時間を持つ』ということだ。これまでに、劇団四季ライオンキングや宝塚の鑑賞、パークゴルフ大会など魅力的な企画を実現してきている。仲間との楽しい時間の共有は、強い連帯感を生み出すとともに豊かな感性を育くむ。

馬渕さんの発想はとても柔らかい。「地元に文化施設などを他の町と争ってつくる必要はない。それならバスを用意して隣町や都会に出かけて行って楽しめるようにすれば良いのよ」と明快だ。

明るく元気な女性のパワーは、地域とってもプラスの効果をもたらす。忙しい中でも、遊休タオルを集めて社会福祉協議会に寄贈したり、常呂町厚生病院の花壇の花植えといった地域貢献にも女性部で取り組んでいる。「地域の人から喜んでもらえると嬉しくて、自分たちの励みにもなるの」とニッコリ。

もう一つ女性部の重要な取組が、今年で十年目となる直売所である。五月末から八月末の三ヶ月間ではあるが、常呂の地場野菜を買うことができる直売所として地域の方に好評を得ており、また高齢者の方のふれあいの場としても生かされている。

この直売所は、農協の参事が馬渕さんにこんな相談をしたことから始まった。「幼い子どもがスーパーやコンビニなどの美味しくない野菜を食べて、野菜嫌いになっている。農業の町なのだから、なんとか美味しい野菜を食べてもらえる方法を考えて欲しい」と。もともと野菜地帯でないこともあり、スーパーマーケットでは地場野菜は扱われず、その日に採れた地場野菜がその日のうちに食卓に上るシステムは存在していなかった。そこで馬渕さんが考えたのが直売所である。

現在、運営は上手くいっているが、女性部員が全てを担当しているため、野菜が出揃う時期なのに本業が忙しいという理由から三ヶ月で閉所しなければならない。馬渕さんとしては開設期

間を延ばしたいと考えていて、女性部という枠に捕らわれずお年寄りの方や組合員以外の方に協力してもらいながら、地域の人が旬の野菜を口にできる機会を増やしたいと思っている。しかし、周りの人たちが馬渕さんを女性部長という肩書きで見ているため、直売所イコール女性部という構図を崩すのが難しいと言う。また、馬渕さんが個人的にしたいことでも女性部の活動として見られてしまい最近は窮屈さも感じているそうだ。でも、直売所に来るお年寄りから「ここに来るとみんなに会えるので楽しいの」と喜ばれるとまた元気になる馬渕さんだった。

平成24年度ＪＡ北海道女性協議会
ドイツ海外研修

■常呂の家庭料理は三万円以上？！

馬渕さんがいろんな事に興味をもつようになったきっかけの一つに、こんなおもしろいエピソードがある。十七年程前に役場と農協の事業で東京練馬にある「こぐれ村」というところに直売に行き、その時に青山のレストランで食事をした。そこは全国各地から取り寄せたこだわりの食材で料理を提供する超高級レストランである。しかし、どれを食べても全然美味しくない。しかもそれが三万円のコース料理である。「あれが三万円だったら、うちらの毎日の食事はいくらなんだろう？」とたいそう笑い話になったそうだ。

常呂町が合併する前は、町民にホタテの無料配布が年二回あったというから驚きだ。「ホタテはお金を払うものじゃなくて、知り合いの漁師さんから貰うもの」と馬渕さんは笑う。確かにこんなに舌の肥えた客が相手では、大抵のレストランに勝ち目はないだろう。

それから「いろんな物を見てみたい、聴いてみたい、自分の暮らしているところばかりではなく、外から見たらどう見えるのか、自分たちの豊かさとはなんだろう」と興味が広がっていったという。こうなると不思議と周りからの誘いも増えていく。「いろんなところに居場所ができて、人との繋がりも出来てくる。せっかく面白いものを見てきたのだから、自分の中だけに留めておくのはもったいないし、行きたくても行けない人もいる。自分の見た物や感じたことをなるべく人に伝えよう」と心がけたそうだ。するとまた他から情報が入ってくる、それが楽しくなっていく…こんな好循環が生まれていった。

■心に残る恩師の言葉

「私なんでも楽しいって言っちゃう人なので、良くないのかもしれないけど、やっぱりものを分かる楽しさをいかにみんなに広げるかが、今一番大事かなって思う」と語る馬渕さんの心には、今でも恩師の言葉が生きている。

「人間の一生って吊り橋を渡るようなもの。何も知らないことは、狭い足場の吊り橋で風が吹いたら揺れるような恐ろしいものであるが、ものを知ることで吊り橋の足場の幅を広げることができる。吊り橋の幅が広がれば、途中で楽しいこともいっぱいできるから、今は一生懸命勉強しなさい」と優しく諭した高校の英語教師の言葉。

「数学は答えを出す学問ではない、順序どおり考えていけば答えが出る学問である」と、テストで解いていく過程も書かないと点数をくれない高校の数学教師の言葉。

山登りを始めたきっかけは、中学校の恩師が「山登りって大変だけど、この山の途中からの景色は登らないと見えない。ここまで苦労して登らないと見えない景色だから、山に登る価値がある」と語ってくれたからだ。

「若いときに感化してくれる人に出会えた事が自分にとって幸せだった」と言うが、素直に聴く力、受け止める能力を持つ馬渕さんだからこそ生かすことができたのだと思う。

■アドバイザーの繋がりに意味がある

昨年十月に御殿場で開催された全国研修会に出席するなど、積極的にアドバイザーとしても研鑽を積んでいる馬渕さんがアドバイザーをどのように捉えているか伺ったところ、「アドバイザー同士の情報交換も良い刺激になるし、行政だと縦割りになってしまう事もアドバイザーが入ることで地域に合った方法で取り組めると思う。アドバイザーの効果を数字で表すことは難しいですね。『楽しい』とか『広がった』というのは数字では表すことができないでしょ。でも、ブータンの幸福指数じゃないけど、数字が上がらないとしてもそれはゼロということではなく、お互いに接点があることで、何かの時に常呂のことやカーリングのことを思い出してくれる、自分たちの地域のことを知って貰うことは数字には表せないけども十分意味のあることだと思う。」と語ってくれた。

まだまだやりたいことが沢山あるという馬渕さん。重たい荷物を持てない高齢者に農産物を届けたい、新設予定のカーリング場の近くに地場食材を使った食堂をしたいなど今後も仲間と楽しく夢を実現していくのだろう。

インタビューを通じて感じたことは、馬渕さんの笑顔が素敵（この笑顔は学生の時のままに違いない）ということ。そして、ポジティブに生きることで良き仲間ができる、地域を元気にする力となることを私たちに教えてくれている。

トピックス

平成２４年度北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業の一環として、次のとおり指導員会を開催いたします。

■北海道ふるさと・水と土指導員会

日　時：**平成２５年２月１５日（金）１４：１５～１７：３０**
場　所：第２水産ビル　８ＢＣ会議室
　　札幌市中央区北３条西７丁目　℡：011-281-2071
内　容：①北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業地域活動支援事業の取り組みについて
　　②ドイツ農村づくりの事例報告
　　③北海道ふるさと・水と土指導員の今後の取組発表
　　④その他

●現地研修 in 鶴居を開催しました！

平成 24 年 11 月 15 日～16 日に開催した鶴居村の現地研修には、指導員１３名が出席しました。
「地域資源を生かした地域づくり型観光」をテーマに、現地の視察と地域の方々と交流しながらの盛りだくさんの研修となりました。
参加者からは、「人と人のネットワークが上手く機能していた」「人づくりの大切さを感じた」「それぞれの想いを共有する努力の大切さを感じた」など、鶴居の取り組みを参考に地域の課題に取り組みたいとの声もありました。
お忙しい中、御対応いただきました服部指導員をはじめ、暖かく迎えていただきました鶴居村の皆様にお礼申し上げます。

移住促進事業の取組（下幌呂地区）

ファームレストラン「ハートンツリー」

酪楽館

鶴居村

サンクチュアリ

フットパスコース

ふるさと情報館

【編集部から】
年が変わると「今年は〇〇をしよう」とか、少し前向きな気分になりますよね。
そんな時、ふと目にとまったのが目標を達成するのに必要な「意志力」について、心理学や脳科学など多方面から分析されている話題の本。早速、買い求め読み始めております。
目標（＝望む力）を常に忘れずに、目先の報酬に負けないよう上手く自己をコントロール（＝意志力）できれば、目標を次々と達成していける！今のところ夢だけが広がっています。（コバ）